

歴史家との出会い 2

エンガチョという語を、京都に生まれ育った私は知らない（正確には長く知らずにいた）。エンガチョの語は知らないが、「ゆび切った」とか「えん切った」と称しているものは、同様のこどもの遊びではないかと思っている。1978年に刊行された網野善彦さんの『無縁・公界・楽』（平凡社）は、それまでの歴史書とは趣を大きく異にする書である。23篇からなる『無縁・公界・楽』の、その第1篇は「エンガチョ」と題されていた。（表現上の問題があると思う用語を含むが、事例としてそのまま使用した。）

網野さんは歴史の学界に波紋を投げかける多くの発言をされた。曰く、百姓は農民ではない（正確には百姓とは農民だけでなく様々な生業に就く人びとを示す用語、という意味なのだが）。専門の中世では、研究の主眼が荘園における生産と貢納という農業生産、武士の荘園支配様式に置かれた時期にあつて、鋳物師や番匠、傀儡子や芸能の民が諸国を自由に通行する権利を天皇や寺社から獲得し、遍歴の民として大いに経済活動を展開したことを重視する。また、塩つくりや漁業に従事し生計を立てる海民も中世社会の重要な構成員であると言う。

斬新に過ぎると多くの歴史学者には映ったのであろうか、網野さんは批判的となるのだが屈することなく研究を進め歴史を書き改めた。扱う対象の面白味と、従来の歴史観あるいは歴史学の常識を覆す着想から多くの読者を得ることとなっていく。このあたりのことを網野さんの甥で宗教学者の中沢新一さんは、「『無縁・公界・楽』を受け入れるのを、多くの歴史学者は拒否することで自分の身を守ろうとした。それはこの本の中で動いている網野さんの思考の大胆な運動に、そうした歴史学者たちの思考がついていけなかったためだった。」とし、「網野さんは『無縁・公界・楽』が読書界で大きな成功をおさめ、その反動で歴史学アカデミズムからの猛烈な反発を受けたあとに、怯むどころか、前よりも激しい闘志を燃やして、前々から温めてきたこの問題（南北朝時代の後醍醐天皇に焦点をあて、近代の天皇制に連なる側面をも問題の所在を明らかにしようとする試みのこと）に、真っ正面から立ち向かおうとした。」とする。（『僕の叔父さん網野善彦』 集英社新書 2004）

県立埋蔵文化財センターに勤務していた1998年、大学の先生らを講師とする連続講座を担当し、「考古学から見た東アジア世界と日本」をテーマに置き、最終講義を網野さんをお願いした。

講義当日は、まる一日埋蔵文化財センターにおられたものだから、かなりの時間お話しすることができた。『無縁・公界・楽』から20年、網野さんの歴史観が確固たるものになろうとしていた時期である。歴史を書き換えようとする網野さんの仕事への共感とともに、率直に、一つひとつの話は興味深く示唆に富んでいるものの、社会の発展をどのように考えるのかについては網野さんの書くものからは見えてこない、という感想を述べた。網野さんは私の愚問に一つひとつ丁寧に答えるとともに、そのことへの私の意見を求めてこられた。冷や汗ものではあったが、心地よい緊張を感じ得る素晴らしい時間であったことは言う迄もない。

「その根本には「歴史は進歩する」という、西欧をふくむ近代歴史学の、揺るぎのない確信があったといってよいと思います。敗戦後に描き出された日本史像もその見方に支えられていることは間違いありません。ところが、その歴史の「進歩」に対する確信自体が、根元の部分から揺るがされ始めているところに、現代の歴史学の直面している転換期の重大さがあるわけです。これは人類社会自体の直面している大問題で、原子爆弾が投下されてからの50年の経緯の中で、人間が自然から開発した自らの力によって、人類自体を滅ぼし得るという事態が現実になってきたということが、この歴史学の転換の背景にあると言わざるを得ないと思います。私自身もそう思っていた時期が長くあったのですが、自然を開発し、生産力を発展させることが、社会を「進歩」させることになるという、我々自身が最初から疑うことのなかった歴史学の「自明な前提」、人間が努力をすれば世の中は進歩するという「単純な確信」、……それ自体が基本的に揺るぎ始め、現在にいたっては、こうした見方が根本から崩れつつある、と言ってよいと思います。」

『歴史としての戦後史学』（日本エディタースクール出版部 2000年）に収められた「戦後歴史学の50年」において、網野さんは、人間の自然へのはたらきかけが歴史を進歩させるという確信が人間自身の行動により揺るがされており、そのような中、歴史を進歩、発展としてとらえることをも見直さなければならぬとした。「戦後歴史学の50年」はさらにこう続く。

「人類の青年時代はもはや確実に終わりを告げたといわなくてはなりません。これは否応のないことで、人類は自分の置かれている立場を十分に思慮深く考えながら、自らを滅ぼしうる大きな力を制御しつつ進まない、うっかりすると急速な頓死を迎えてしまう危険を絶えず^堪んでいる状況の中におかれている、いわばそうした壮年時代に入ったことを自覚しつつ、現代社会の現実を認識し把握することが必要だと思ふのです。」

これは昨年12月の「校長室17」においても紹介した文であり、その際は引用のあとに「と警鐘を発する。」とまとめた。いま改めて引用し、今回の趣意である歴史学に即して語彙を抜き取るなら、文末に近いところの「現代社会の現実を認識し把握する」が相応しい。

私は、ここに歴史を学ぶ意義があると思ふのだが、いかがであろうか。

網野さんは鎌倉時代において京都と鎌倉の二つの政権があり、いわば二つの国家が存在したと言われる。鎌倉時代に限らず、東と西の歴史ということを取り沙汰され、それは現在にいたる文化の様相にまで迫っている。翻って前号で取り上げた黒田俊雄さんは、鎌倉時代の国家組織を権門体制論で説明する。権門体制論とは、天皇（治天の君）を頂点として、摂関、幕府、寺社がそれぞれ独立しながらも統治や支配を分掌し、権門全体として国家の機能を形成するという考え方だ。まったく異なる見解なのだが、戦後歴史学の中で主流であった、在地領主の成長を基盤とする貴族政治から武士政治へという図式と異なるところ、また日本全体を見渡したときに、一個の強固な権力ではなく、複数の権力が存在することを認知している点において、両氏の論は近接した発想により構築されていると、私は見ている。

年の瀬に 2016

先週、東戸塚駅のエスカレーターの近くで、スマートホン进行操作しながら歩くスマホ君と、まっすぐ歩くマエオ君を見た。年格好はともに30代前半の頃合いか。スマホ君は操作しながら歩くものだから視野は狭く、マエオ君は、視野は広いに違いないものまったくよける気配を見せずに直進する。ぶつかると思った瞬間、ぶつかった。私はぶつかる寸前にスマホ君が慌ててよける、あるいはマエオ君がすっと進路を変えるものばかり思っていたものだから、ぶつかる二人にかなり驚いた。

いったいどうしたって言うんだ。

境木中学校バス停までの道で生徒の皆さんとすれ違うことがある。こちらを見出すとイヤホンをはずし、きちんと「こんにちは」あるいは「さよなら」と挨拶をいただくことができる。これはとても嬉しいことだ。こんな生徒がいる一方で、光陵生の中にもスマホ君はいる。たしかに今でなければならないこともあるだろうけれど、多分おおくの場合そうではないよね。勿論危険だし、他者への迷惑行為でもあるけれど、それよりも、スマートホンを扱っているのではなく、スマートホンに君は支配されているのではないかと、とても気掛かりだ。

とんだ年の瀬談義になってしまった。津久井やまゆり園で悲しい事件があった。横浜で福島から避難してきた中学生が悲しい思いをした。相変わらずいくつかの国が、グローバルと言いながら自国の繁栄追求を声高に言う。テロも頻繁に起きている。あぶり出すと、荒んだ事件が今年も多かった。

いったいどうしたって言うんだ。

来年は、一歩でもよいからステキな毎日になるよう努め、一人でもよいからステキな毎日になるよう努める人が増えれば良いと思う。皆さんの2017年が幸多かれ、と心から思う。